

## 小説 *The Gilded Age* の女性

——とくに Mark Twain のヒロイン

Laura の末路をめぐる——

那 須 頼 雅

Mark Twain は1868年1月、首都ワシントン市の新聞記者クラブで、“Woman—The Pride of Any Profession and the Jewel of Ours”<sup>1</sup> と題して話した。内容は、この演題からも明らかのように、女性絶賛の一語に尽きる。まず開口一番あげすげに “I love all the women, sir, irrespective of age or color.” と、彼自らの、なみなみならぬ女性への憧れの念を告白し、次には二回も “. . . in whatever you place a woman she is an ornament to society and a treasure to the world.” を繰り返し、最後に、 “. . . woman is a lovable, gracious, kind of heart, beautiful—worthy of all respect, of all esteem, of all deference.” という最上の言葉を広く世の女性に献じている。

そのほぼ6年後、1873年11月、Twain はロンドンで催された “the Scottish Corporation of London” の第二百九周年記念祭の席に招かれ、そこでは “The Ladies”<sup>2</sup> というスピーチをしている。その中で彼は、まず “ladies” よりも “woman” という呼称の方が好ましいとして、“that is the preferable term, perhaps; it is certainly the older, and therefore the more entitled to reverence.” と前置きしてから、Joan of Arc, Sappho, Cleopatra, Queen of Sheba, Josephine, Semiramis, Nightingale などの、才色兼備な “sublime women” の名をあげて賛え、その後で女性のもつ比類ない特性、愛と忍耐と誠実と自己犠牲などの美点を次のごとく賞揚した。

Woman is all that she should be—gentle, patient, long-suffering, trustful, unselfish, full of generous impulses. It is her blessed mission to comfort the sorrowing, plead for the erring, encourage the faint of purpose, succor the distressed, uplift the fallen, befriend the friendless—in a word, afford the healing of her sympathies and a home in her heart for all the bruised and persecuted children of misfortune that knock at its hospitable door.<sup>3</sup>

ところが、この Twain が、これら二つの講演の合間、正確に言えば1873年2月から4月にかけて、Charles D. Warner と協同執筆して出した小説 *The Gilded Age* で、彼のヒロイン Laura に急死という悲惨な末路を被せている。つまり、彼女は暴徒の投石に当たり、致命的な衝撃を受け、あっけなく死ぬという末路を辿るのである。

つまり、Twain はほぼ時を同じくして、片や口では女性礼賛を謳い上げ、片や筆をとると、まるで別人のように、女性に冷たく、彼のヒロインを惨殺する。この Twain の矛盾を、われわれは一体、どのように理解したらいいのだろうか？

もし仮りに、この小説で女の死という結末が避けられないものであるとするなら、この Twain のヒロイン Laura が死ぬより、Warner のヒロイン Ruth の死の方が、あれほどの重態におちいり、Philip には Alice という別の恋人もいることから、むしろ自然な結末ではなかったろうか？

## 1

小説 *The Gilded Age* の描く1870年代のアメリカ社会は、南北戦争終結で大きな変革を迫られた。この過渡的の時期にあって、かつての持てる者が持たざる者に転落し、また、かつて価値あるものとして珍重されたものが、今や価値なきものに落ちた。誰も一顧だにしなかつた荒涼たる西部の土地が、鉄道、汽船の発達により、いきおい多くの人びとの熱い視線を浴びることとな

った。その煽りを受け、当時の血気盛んな若者たちはじっと父親の土地に居つこうとはせず、大都市や西部の地に乗り込み、一攫千金の夢に酔いしれた。

To the young American, here or elsewhere, the paths to fortune are innumerable and all open; there is invitation in the air and success in all his wide horizon. He is embarrassed which to choose, and is not unlikely to waste years in dallying with his chances, before giving himself to the serious tug and strain of a single object. He has no traditions to bind him or guide him, and his impulse is to break away from the occupation his father has followed, and make a new way for himself. (I, 112)

この軽佻浮薄な風潮は程度の差はあれ、女性にも及んだ。南北戦争以前の男性絶対優位が崩れはじめ、女性にも男性に伍して社会に進出する道が少しずつ拓けてきた。それ以前は、普通の家庭の子女なら、たとえ「どんな事情のもとであれ、食うために働くことは許されないことだった<sup>4</sup>」。当時とはとくに厳格なピューリタンの宗規、慣習に縛られ、「無力な女の定めによって目隠しされ、羽根が切られ、閉じこめられたまま<sup>5</sup>」の状態にあった。こういう男性社会に反発し、その「伝統の檻」を破ろうとする“a fierce young eagle” (I, 141) が Warner のヒロイン Ruth である。Ruth は父 Eli Bolton に向って、将来彼女が医学の道に進みたいと次のように訴える。

“I want to be something, to make myself something, to do something. Why should I rust, and be stupid, and sit in inaction because I am a girl? What would happen to me if thee should lose thy property and die? What one useful thing could I do for a living, for the support of mother and the children? . . .” (I,141)

この必死の訴えがついに彼女の父 Bolton の賛同を勝ちとり、そしてさらには母 Margaret のかたくなな気持も和ませる。しかしそれでも世の男性の横

暴に対する彼女の憤懣は、そうすぐにはおさまらない。愛人 Philip に次のようになってかかっている。

“...but the worst of it is that you men do not want women educated to do anything, to be able to earn an honest living by their own exertions. They are educated as if they were always to be petted and supported, and there was never to be any such thing as misfortune. I suppose, now, that you would all choose to have me stay idly at home, and give up my profession.” (II, 172)

既に述べた通り、当時のアメリカ社会、とくに東部では、女が生活のために職業につくことは許されなかった。それもフィラデルフィアの旧家の令嬢が、人体解剖とかの医学の講義を受け、女医の資格を取って開業するなどということは前代未聞であった。がこれと同じくらい前代未聞だったのは若い女が首都ワシントンで、こともあろうに“woman lobbyist”として活躍し、首都の男たちを手玉に取ることだった。

とは言うものの、これら二人の“fierce young eagles”の間には、基本的な相違点のあることを見落してはならない。それはつまり、Ruth は、両親をはじめ、多くの周囲の反対を押し切って、女医になるとはいえ、基本的に彼女は東部出身であり、一流家庭の“a young lady”である。ところが、Laura はそもそも孤児で、「伝統の檻」のない西部に育ち、一人前の女に成長して首都に乗り込む、いわば“self-made woman”なのだ。たしかに Ruth とて、「西部か南部か、どこかよその土地に行けたらいいのに<sup>6</sup>」と望み、東部と訣別したいという気持はある。しかし所詮 Ruth は伝統的都フィラデルフィアという「箱」の中に安住し、その中で、母 Margaret の言うように、「ほとんど思い通りに生きている<sup>7</sup>」というにすぎない。一時的には「あの娘がやがてそのうちに恋におちて、結婚してくれるということになればいいんだが<sup>8</sup>」という母の切なる願いにも耳をかさず、女医になろうという

信念を貫く。しかし結局、Philipの求愛を受けるや忽ちにして結婚する気になり、その母の願い通り、家庭の主婦に収まってしまう。要するに Ruth は一時的には“a fierce young eagle”ぶりを示し、“new woman”<sup>9</sup>としての気炎を吐くとはいえ、最後は彼女の母と同様、男性の“pet”の座に落ちつくのである。これに対し Laura は、徹頭徹尾、“a fierce young eagle”の姿勢を崩そうとはしない。それはまるで Laura が幼い身で孤児の身に突き落された汽船爆発事故、あの忌まわしいミシシッピ河上の衝突・炎上事件の真犯人である男たちへの怨念に取り憑かれてでもいるかのように、この Laura は執拗に男性に、男性優位社会に、戦を挑みつつける。

このように、Laura がこの小説に登場する数かずの“pet”女性とは歴然と一線を画する存在であり、真の意味での“new woman”であることに、まづわれわれ読者は着目する必要があるだろう。

## 2

*The Gilded Age* には“A Tale of To-Day”という副題が付してある。この“A Tale of To-Day”の“To-Day”とは、言うまでもなく、Twain と Warner とがこの小説を協同執筆した1873年代初頭を指している。そして、この“To-Day”の描出が、当時の危険な風潮に対する批判、攻撃であることも疑問の余地はない。では、この批判、攻撃の対象とは一体何か？この問いには、幸いにして Twain がこの小説の英国版に副えた次の“Preface”で答えてくれている。

“In America nearly every man has dream, his pet scheme, whereby he is to advance himself socially or pecuniarily. It is this all-pervading speculativeness which we have tried to illustrate in ‘The Gilded Age.’ It is a characteristic which is both bad and good, for both the individual and the nation. Good, because it allows neither to stand still, but drives both for ever on, toward

some point or other which is ahead, not behind nor at one side. Bad, because the chosen point is often badly chosen, and then the individual is wrecked; the aggregation of such cases affects the nation, and so is bad for the nation. Still, it is a trait which it is of course better for a people to have and sometimes suffer from than to be without.

“We have also touched upon one sad feature, and it is one which we found little pleasure in handling. That is the shameful corruption which lately crept into our politics, and in a handful of years has spread until the pollution has affected some portion of every State and every Territory in the Union. . . .”<sup>10</sup>

ここに Twain の、この小説にこめた本音がうかがえるのだ。この一文は、Twain が、検閲者の妻 Olivia、共作者の Warner と別れ、異国の地英国で、独りしたためたからである。何かにつけ、アメリカを蔑視、冷笑する英国人を意識してか、Twain はいくぶん押えた言い回しをしているものの、アメリカ人が卒直に認め、改めなければならぬ面として、“all-pervading speculativeness” と “shameful corruption” をあげている。これら二つの “pollution” のうち、前者はとくに西部の土地に関わり、後者はとくに首都ワシントン市で蔓延した。都会っ子の Harry は、田舎娘 Laura に首都を説明して、こう言う。

“. . . It's democratic, Washington is. Money or beauty will open any door. If I were a handsome woman, I shouldn't want any better than the capital to pick up a prince or a fortune.” (I, 194)

ただし、ここでわれわれは、この首都が “democratic” だと言う Harry の言葉をそのままには受け取れない。というのは、彼の友人で、田舎育ちで彼よりも遥かに都会の空気に敏感な Philip が、後の所で、この首都に立ちこめる雰囲気をも “a feverish atmosphere in which lunacy would be easily

developed" (II, 125) と受け止めているからである。これら二人の、この対照的な首都観をここで突き合せて見てみると、当時のワシントン市の実情がはっきりしてくる。つまり、戦後頹廢した首都は、先のただ "money" か、"beauty" かにうつつを抜かす「ぐうたら共」("the Helpless")の巢窟さながらで、ひたすら国からの特別支出金、補助金、高給にたかる廢人同然の「ぐうたら共の溜り場」("the grand old benevolent National Asylum of the Helpless") (I, 240) になり下っている。だからこそ、たとえ女の身でも、寄る辺ない孤児であっても、これら「ぐうたら共」の垂涎的の "money" か "beauty" かを目の前にちらつかせれば、首都ではどんなことでも成らぬことはないというのである。

これら二人の若者すら気付くこの頹廢的、病的な首都の風潮に、老練な政治家 Dilworthy<sup>11</sup> が気付かないはずはない。この上院議員は、目敏く Laura の比類ない美貌と、「テネシーの土地<sup>12</sup>」で転り込むはずの彼女の幻の大金とに目をつけた。この女を首都に呼び寄せ、彼女をその拜金亡者の前に据えれば、彼女の "money" と "beauty"<sup>13</sup> とに眩惑され、彼らは足下にひれ伏し、心からの忠誠を誓うはず。そうすると結果的には、Dilworthy の政治勢力を高め、いつまでも上院議員の座に居坐れて、思い通り私腹を肥やすことができる、と Dilworthy は踏んだのである。要するに Dilworthy の魂胆は、首都の男たち、とりわけ、自分の地位を危うくする政敵の動きを、彼らの垂涎的 Laura を "trap"<sup>14</sup> 代りに用いて封じ込み、絶対優勢を勝ち取ろうというものである。

事実、彼のこの思惑はものの見事に適中。Laura は一足先に首都入りしていた義兄 Washington に出迎えられて、かけられる言葉がこうだ。

"... You'll see. There will never be a woman in Washington that can compare with you. You'll be famous within a fortnight, Laura. Everybody will want to know you. You wait—you'll see."  
(II, 1)

これを聞き、初めのうちは半信半疑だった Laura も、ある閣僚邸での特別レセプションで、Dilworthy 議員に紹介されると、そこに集う名士、紳士、その他上流のお歴々が彼女の美しさに息をのみ、賛嘆の声をあげ、彼女自身の魅力に自信をもつようになる。

... wherever she moved she was followed by a buzz of admiration that was grateful to all her senses—so grateful, indeed, that her white face was tinged and its beauty heightened by a perceptible suffusion of color. She caught such remarks as, “Who is she?” “Superb woman!” “That is the new beauty from the West,” etc., etc.

Whenever she halted, she was presently surrounded by Ministers, Generals, Congressmen, and all manner of aristocratic people. (II,4)

こういう Laura への崇拜の念を一層高めたのは、すでに触れたように、将来いつの日にか彼女に一大身代が授かるという巷の噂のせいである。それは今でこそ、Laura は Dilworthy 議員の邸に身を寄せる一居候女にすぎないものの、末は、彼女もその相続権をもつ西部の広大な「テネシーの土地」が、そこに建設予定の黒人大学法案の通過と共に、何百万ドルという莫大な金を生み、彼女は一躍「百万長者<sup>15</sup>」にのし上がるという噂である。

さてこうして、Laura は先の首都の男性の垂涎的“money”と“beauty”の両方を併せ持つ、比類のない存在となる。当然にしてそこに屯ろする“money” 亡者、“beauty” 亡者の男どもが彼女を黙って見過ごすわけがなかった。すると彼女とは早くからの知り合いで、彼女を獲得する成功率では自分が一番だと、絶対の自信をもち、高を括っていた Harry は、烈しく嫉妬心を煮えたぎらせ、次のようにぼやく。

Curious girl, anyway. But how they do swarm about her! She is the reigning belle of Washington after this night. She'll know five hundred of the heaviest guns in the town before this night's non-

sense is over. And this isn't even the beginning. Just as I used to say—she'll be a card in the matter of—yes, *sir!* (II, 5)

この苦り切った Harry とは全く対照的に、この Laura の、全く驚異的なまでの “the reigning belle of Washington” ぶりに目を細めて喜び、“my daughter” と呼び、“pin money” を心付けとして彼女の手握らせるのは、言うまでもなく Dilworthy 上院議員である。

しかし、ここまでは、Laura は何ひとつこれといって特別な男攻略の手立てとか、戦術とかを使ってはいない。ただ Laura は、第二卷十一章のモットー（ナイジェリアの諺）の通り、自らを「ねずみ取り器」(“trap”)に見立ててもいるかのように、そこに獲物が入るのを待つだけなのだ。

ねずみが、ねずみとり器に入る。そのねずみをねずみとり器がつかまえる。もしそれにねずみが入ってこなければ、ねずみとり器はつかまえないものを。

(ナイジェリア東南部エフィック族の諺。英訳の拙訳) (II, 70)

さてこうして一度掴えた“間抜けねずみ”の男どもは、Laura の元から、いくら逃げ出そうとあがきにあがいても、所詮それは無駄である。

These unfortunates followed Laura helplessly, for whenever she took a prisoner he remained her slave henceforth. Sometimes they chafed in their bondage; sometimes they tore themselves free and said their serfdom was ended; but sooner or later they always came back penitent and worshipping. (II, 96)

そしてその挙句、「噂では、彼女の歩く道には失恋男がずらり敷石代りになっているなどとささやかれるようになる<sup>16)</sup>」のである。

この Laura はまた読者に、別の “the Helpless” の症状を正確に写し出す役目を果たしている。彼女は Laura Van Brunt という名前だけで Hawkins 家に入り込んだ “stranger” であった。それだけに、この一家の

“speculativeness” が、そして、これがもたらす悲慘さが、手に取るようにわかった。「テネシーの土地」の夢に酔い、事業にも失敗し、一家離散に追い込まれた Squire Hawkins は長男 Washington にこう言う。

“Washington, we seem to be hopelessly fallen, hopelessly involved. I am ready to give up. I do not know where to turn—I never have been down so low before, I never have seen things so dismal. (I, 58-9)

この親の口から言うも悲慘な言い渡しをしながらも、養父 Hawkins はなおも「テネシーの土地」への夢が捨て切れず、次のように口をすべらしてしまう。

... we must lose you, also, for a little while, my boy. But it will not be long—the Tennessee land—” (I, 59)

そして、この家族離散の手だても空しく、Hawkins は遂に立ち直れず、敗残の身のまま、臨終を迎え、枕辺に集った肉親たちに、次の遺言をする。

“I am leaving you in cruel poverty. I have been—so foolish—so short-sighted. But courage! A better day is—is coming. Never lose sight of the Tennessee Land! Be wary. There is wealth stored up for there—wealth that is boundless! The children shall hold up their heads with the best in the land, yet. Where are the papers? Have you got the papers safe? Show them—show them to me!” (I, 91)

このいまはの際の言葉は、己れの愚しさを詫びながら、その舌の根のかわかぬうちに、尚もその「呪いの土地」にしがみつこうとする投棧師の愚しさを如実に示している。案の定、何年か経つと、息子 Washington が、この亡き父と同じ夢に酔いしれ、次のごとく Laura の失笑をかうのである。

“You don’t change, Washington. You still begin to squander a

fortune right and left the instant you hear of it in the distance; you never wait till the foremost dollar of it arrives within a hundred miles of you.” (II, 37)

このように Twain は、孤児 Laura を用いて、南北戦争後の後遺症とも言うべき “speculativeness” と “corruption” とを、読者に見事なまでに浮き彫りにして見せる。

## 3

Laura が尋常一様な女でないことは、この小説の第 I 卷第五章に登場してより、第 II 卷の末尾にとくに副えられる “APPENDIX” までの随所に、明確に打ち出されている。彼女の呼称一つをとって見ても、“iceberg”, “Duchess”, “princess”, “belle”, “empress”, それに憎しみのこもった “deep woman”, “devil” など、十指に近い。彼女の吐く怒号の言葉は男顔負けの激しさをもち、燃えさかるばかりの憎悪の迫力に満ちている。養父の没後間なしに広がり始めた彼女の出生の秘密を面白おかしく吹聴して回る村人に対して、Laura は “But who are they? Animals!” と罵り、その噂に怯え、自分に寄りつかなくなった初恋の男 Ned には、このように吐き棄てる。

“The coward! Are all books lies? I thought he would fly to the front, and be brave and noble, and stand up for me against all the world, and defy my enemies, and wither those gossips with his scorn! Poor crawling thing, let him go. I *do* begin to despise this world!” (I, 102)

その後、結婚詐偽にあい半死半病の一時を過ごした彼女は元の純情可憐な乙女から “female soldier” へと変わった。目には、かの Beatrice Cenci の憂いをたたえ、内には “devil” を宿した。こうして Dilworthy と会い、ワシントン行に心が傾くのだが、その首都上りの彼女の意気込みもまた、すさまじい。

“... I am perishing to go! I do long to know whether I am only simply a large-sized pygmy among these pygmies here, who tumble over so easily when one strikes them, or whether I am really—”

要するに Laura という女は「自分が男性に対して打ち勝つ力を持っているという実証を得るのが、こたえられないほど嬉しかった<sup>17</sup>」という女傑である。世の有象無象の“pygmies”相手では当然物足りない。前もって張り巡らした罠にかかってくるのは、せいぜい間抜けな“pygmies”どまり。“大物”をと思えば、手を拱いて待つのでなく、積極的に彼女の方から攻めて行き、彼女の罠にはめこまねばならない、と彼女は考えるのだ。

その最初の 大物が、「慈善事業政府支出金 下院特別委員会議長」（“the chairman of the House Committee on Benevolent Appropriations”）Buckstone である。この議長をうまく抱き込めば、彼女の目指す「黒人大学法案」通過の可能性は格段に高くなることは必定。そこで Laura は、彼女の「女」の「魅力」と「策略」とを存分に駆使する。たとえば、昔の彼の贈り物「つけの小枝」（“the spray of box”）の話を巧みにでっち上げて拗ねたりなど、さながら“prostitute”<sup>18</sup>のごとく、なりふり構わず色仕掛けの攻勢を掛ける。そしてあげく、Laura は自分の勝ちを確認しはするものの、次のようなざらざらした厭な感慨をかみしめないわけにはいかない。

“... this is a desperate game I am playing in these days—wearing, sordid, heartless game. If I lose, I lose everything—even myself.”  
(II, 69)

この後味の悪さを感じつつも、もはや後には退けない。この法案通過のためには、また次の強敵に立ち向かわなければならない。その強敵が、この法案反対派の大立物 Trollop 議員である。余程の相手でなければ動じない Dilworthy 議員でも、「彼に気を許すんじゃないよ、君！……油断するなよ。よくよく気をつけるんだよ<sup>19</sup>」と心配の余り Laura に声をかけるくらいであ

る。そんな議員の気遣いなど尻目に彼女は大胆不敵に、敢然とその「戦場」に赴く。そして今度は、前の Buckstone に対する時のように、媚びを売るなどの女々しい戦術はとらない。勇敢な“female soldier”として堂々と、敵の真正面から攻め、その後、敵のたじろぐのを見澄まして脅迫戦術に切り変えるという戦法である。

Trollop 議員がかつて関わりをもった「汽船特別補助金法案」(“The Steamship Subsidy bill”), 「米国内陸開発会社役員救済法案」(“National Internal Improvement Directors’ Relief Measure”), 「貧困下院議員迦及支出金法案」(“the Indigent Congressmen’s Retroactive Appropriation”) などで謝礼の授受、その後の不可解な態度、変節の点など、次々に取り上げては厳しく訊す。この鋭い追求、食い下がりには、さすがの Trollop もぐらつき、あわて出し、いきり立ち、そして居直り、一笑に付そうとはつとめる。しかし Laura の追撃の手は一向に弛む気配もない。その上、彼女が最後の切り札として Trollop 議員の議会演説原稿の ghost-writing の事実を突きつける。それも実は、その問題原稿の ghost-writer は彼女自身であることを明かしての攻撃である。これらの明白な証拠を抛り所にしての猛攻に、Trollop も、必死に応戦はするものの、遂にもはやかなわじと見て、彼女の軍門に降るのである。

この Trollop 攻略を知り狂喜するのは言うまでもなく、またも Dilworthy 議員である。この思っても見なかった大勝利に議員は大喜びし、息もつもらさんばかり。次の Dilworthy と Laura との会話—異常に短かく中断し、上ずった感嘆の言葉—に、この議員の歓喜の極みが見事にとらえられている。

“Impossible! You—”

“I’ve made him promise to vote with us!”

“Incredible! Abso—”

“I’ve made him swear that he’ll *work* for us!”

PRE—POSTEROUS!—Utterly pre—break a window, child, before

I suffocate!”

“No matter, it's true anyway. Now we can march into Congress with drums beating and colors flying!”

“Well—well—well. I'm sadly bewildered, sadly bewildered. I can't understand it at all—the most extraordinary woman that ever—it's a great day, it's a great day. There—there—let me put my hand in benediction on this precious head. . . .” (II, 114-5)

ここで遂に Dilworthy をも凌ぐに至った Laura の凄腕が読者にはっきりと印象づけられる。

#### 4

Laura はこのように輝しい戦歴を重ね、“female soldier”として恐れられるようになる。つまり、もはや Dilworthy の手先どころか、彼と対等に位する烈女として活躍できる力をもつに至る。こういう立場に立って迎えるのが、昔の愛人 Selby との戦である。これは、以前の戦とは異なり、Dilworthy 上院議員とも関わりがなければ、また、「黒人大学法案」とも直接関係のない、純粹な意味での「人間」と「人間」との息づまるばかりの戦である。Laura が初めて一人の女として、「人間」として、彼女の「一生をめちゃめちゃにしてしまった<sup>20</sup>」かつての愛人に対して挑むものである。何も知らない、うぶな乙女だった Laura を「もて遊び、まるで汚いぼろ雑巾のように、ごみくずの中に棄てた<sup>21</sup>」元南軍大佐に対する復讐である。清純無垢で、虫も殺せない処女を無残にも“a beautiful devil” (II, 113) に変えた妻子ある男 Selby を相手にしての、男と女の対決である。

Laura は、昼間のレセプションで、思いがけなく彼女のかつての愛人で、同棲しながら自分を棄てた Selby の姿を見かけ、一時は動転するが、気を静めた後、一対一で対決することにする。わざと書体を変え、ある一婦人からの手紙のようにして差出し、邸での面会を求める。他方、Selby は、それ

がよもや昔裏切って棄てた女 Laura の仕掛けた罠とは知るよしもなく、出向く。客間に通されると、Laura がいきなり彼の目の前に立ちはだかる。すると、彼はその場にそのまま立っておれないほど驚く。Laura はその彼に、狂ったように凄味を利かし、すさまじい啖呵を次のように投げつける。

“You have ruined my life,” she said; “and I was so young, so ignorant, and loved you so. You betrayed me, and left me, mocking me and trampling me into the dust, a soiled cast-off. You might better have killed me then. Then I should not have hated you.” (II, 72)

しかし、そこは女の悲しさ、せつかくそこまで燃え上った憎悪の念も彼の巧言に丸めこめられ、やがてはしぼみ、あげくはまた彼の情婦に収まってしまふ。そればかりか、彼女は前よりもさらに一層向う見ずで、危険な関係に落ち、次のように彼の正妻のことをきめつける。

His wife—she was not his wife, except by the law. She could not be. Even with the law she could have no right to stand between two souls that were one. It was an infamous condition in society that George should be tied to *her*. (II, 74)

Laura はまたも愛欲に狂い、この男を命がけで愛する余り、この無軌道を正しいと信じて疑わない。つまり、彼が正妻と離婚して、自分とどこか他国で一緒に暮してくれるべきだと思い込むのである。ところが Selby には、そんなことを実行する気持など、毛頭ない。かつて戦時下に Laura に近づいたのは当時の若さの一時的な色欲のためだったし、今度のそのような約束は、彼女の“lobbyist”としての力、さらには、彼女の後ろ楯 Dilworthy 議員の力を利用して、彼の目指す綿花賠償金を手に入れようという金銭欲のためだけだった。だから Selby は、口先では Laura に「君を愛している一妻とは離婚する」と甘いことを口にしながら、肚では、彼の妻に洩らす次の言葉通り、汚い裏切りを企てているのだ。

... this woman was a lobbyist, whom he had to tolerate and use in getting through his claims, and that he should pay her and have done with her, when he succeeded. (II, 84)

しかし Laura はこの時はすでに昔のうぶな乙女ではない。いち早く、Selby のこの汚い腹のうちを見抜き、彼の再度の裏切りに備えている。そうとはつゆ知らずに Selby はお目当ての賠償金を手にすると、こっそりと家族と共にワシントン市を離れ、英国に向うため、ニュー・ヨークのサザン・ホテルに泊る。そこへいきなり Laura に踏み込まれる。「お願いだ！それが駄目なんだ、撃たないでくれ<sup>22</sup>」と命乞いをする Selby に今一度思い直す機会を与える。が、それも空しいとわかるや、ピストルの引金を二度引き、彼を撃ち倒す。

Laura は即座にその場で逮捕され、刑務所に留置される。しばらくして裁判となるものの、彼女の精神の一時的錯乱状態の故の犯罪という弁護に支えられ、遂に無罪放免を勝ち取る。この判決が下りると、廷内の人たちは、わっとばかり歓声をあげ、口々に彼女に「おめでとう」の祝福の言葉をおくる。“人殺し女”と蔑まれるどころか、彼女はまるで“凱戦將軍”さながらの暖いもてなしを受ける。

こうして Laura はこの元南軍大佐との戦でも、相手を縮み上げさせ、震えおののく歴戦の“soldier”に対して実に冷静に引導をわたし、完全な勝利を得るのである。

## 5

最初にあげた Twain の“The Ladies”と題するスピーチの中で、特に Joan of Arc の名を掲げ、次のように賛美の言葉を贈っている。

*Who was more patriotic than Joan of Arc? Who was braver? Who has given us a grander instance of self-sacrificing devotion? Ah! you remember, you remember well, what a throb of pain, what a*

great tidal wave of grief swept over us all when *Joan of Arc fell at Waterloo*.<sup>23</sup>

どの “soldier” にもまして勇敢で、しかもどの愛国の志士にも劣らず愛国心の厚かった “*Joan of Arc, the unconquerable*”<sup>24</sup> でさえ、遂には運命の神に見放され、ワートルローで苦杯をなめるのだが、Laura もニュー・ヨークの講演会場で大波乱を引き起し、大敗を喫する。

義兄 Washington から、“The bill is lost. Dilworthy is ruined.” (II, 270) の悲報が届くと、Laura は色をなして “The world is agaist me. Well, let it be, let it. I am against it.” (II, 270) と吐き棄てるが、それを義母 Mrs. Hawkins がやさしくたしなめて、“This is a cruel disappointment to you and Washington; but we must humbly bear it.” (II, 270) と言う。それに Laura は激しく反発して、“Bear it. . . I’ve all my life borne it, and fate has thwarted me at every step.” (II, 270-1) と言い返す。義母はまたこの前に、“Let us go home at once.” (II, 270) とすすめるが、それも断る。

The parting between Laura and her mother was exceedingly painful to both. It was as if two friends parted on a wide plain, the one to journey toward the setting and the other toward the rising sun, each comprehending that every step henceforce must separate their lives wider and wider. (II, 275)

この Laura にとって何物にも替えられない義母 Mrs. Hawkins とさえ訣別して Laura が取り組もうとしたのは、演題 “The Revelations of a Woman’s Life” の、彼女の講演会の開催であった。たとえこの開催にどんなに反対が起ろうと、どんな障害に出くわそうと Laura はものともせず決行しようと肚を決め、心にこのように誓うのだ。

So, to take up life and begin again was no great evil. She saw her way. She would be brave and strong; she would make the

best of what was left for her among the possibilities. (II, 29, 295)

このすさまじい闘志は、Joan of Arc が St. Honore の城門攻めで、おお弓の太矢に当たり、倒れながらも退却しようとせず、指揮をとりつづけた勇猛ぶりを思わせる。

Although disabled, she refused to retire, and begged that a new assault be made, saying it *must* win; and adding, with the battle-light rising in her eyes, "I will take Paris now or die!"<sup>25</sup>

この不退転の決意を固め、闘志に燃えた Laura にとって、開会に先立つての紹介の辞など必要でなかった。登壇の時が知らされるや、Laura はさながら "empress" (II, 297) のごとく毅然とした姿勢で演壇に進み、壇上に立つ。ところが会場内に居たのは、「一握りの粗暴な男ども<sup>26</sup>」に、「十人か十二人かの、さらに輪をかけて粗暴な女ども<sup>27</sup>」だけ。これらの、とぐろを巻いて待ち構えていた連中の中から、汚いやじが飛び、「嘲笑、猫の鳴き真似<sup>28</sup>」(II, 297-8) がかん高くなり、ありとあらゆる罵詈雑言が湧き起った。それに彼女目掛けて何物かが投げつけられ、外れると、また、わっという喚声がり、擲揄が湧く。さしもの Laura も、遂に居たたまれず、壇を駆け降り、控室にとって返し、すぐさま外に出て、難を避けようとする。それでも尚追いつがる暴徒に取り巻かれてしまい、色んな悪態、嘲りの言葉を浴せられる。そして、やっとの思いで馬車に乗り込んだ Laura に、外から石が投げつけられる。それが馬車のブラインドを破って中に飛び込み、彼女の額に当たり、額が裂け、鮮血が滴り落ちる。ようやくにして家に辿り着き、彼女の部屋の椅子に腰掛け、机にうつぶせ、その姿のまま、誰にも看とられることなく、独り淋しく死ぬのである。

The jury of inquest found that death had resulted from heart disease, and was instant and painless. That was all. Merely heart disease. (II, 323)

## 6

さてここで最初に掲げた問題に戻ろう。ここまで辿ったのでも明らかなように、あれほどまでに華やかな生涯を送り、嚇々たる勝利に輝いた Laura が、何故にかくもあっさりと死ななければならないのか？ あゝの汽船事故にも奇蹟的に生き残し、質の悪い出生の秘密発覚にも屈しなかったし、Selby の非道な結婚詐偽事件にもめげず、その復讐も遺憾なく遂げるにも拘らず、講演での、たった一回の不首尾だけで衝撃を受け、忽然と死ぬというのは、たしかに読者には意外である。これでは余りにも不自然な結末としか、言いようがなからう。

私の勇氣、私の力、少しも役に立ちませぬ！ ああ、天と地の神よ、私の声に耳をおかしくだされ！ 私は死を避けられないのですか、この大地と天との間でほんとうに死ぬほかないというのですか！  
(キーチエイ種族語、英訳の拙訳) (II, 158)

この第Ⅱ巻第十六章のモットーが、そのまま Laura の神への抗議であり、癒しようもない憤怒のほとぼしりである。それだけに、読者は一層彼女だけは死なせたくないという思いを強くする。Laura は、この講演の失敗に気付く、講演幹旋人 Griller に向って、次の言葉を投げつける。

“Oh, do not speak! Take me away—please take me away, out of this dreadful place! Oh, this is like all my life—failure, disappointment, misery—always misery, always failure. What have I done, to be so pursued! . . .” (II, 298)

この彼女の訴えの通り、Laura はとくにこのような指弾を受け、そのあげく死ななければならないようなことは何ひとつ仕出かしてはいない。ただ強いと言えば、一人の「女」として、さらには、一人の「人間」として、男の

“pet” に収まることを拒み, “give and take” (II, 29) の生き方に従い, 彼女自身の生を燃焼させてきただけのことである。これにさらに付け加えれば, この “new woman” としての一女性の生きざまを “The Revelations of a Woman’s Life” (II, 272) の演題の下に洗いざらい打ちまけようとしただけにすぎない。

ところが実は, このことに問題があったのである。

O lift your natures up:

Embrace our aims: work out your freedom. Girls,  
 Knowledge is now no more a fountain sealed;  
 Drink deep until the habits of the slave,  
 The sins of emptiness, gossip and spite  
 And slander. die. *The Princess.* (I, 207)

この小説にはすでに述べた通り, “A Tale of To-Day” の副題が付してある。この “To-Day” とは, この Tennyson の詩の教えなど, もつての外, 断固潰そうという男性絶対優位の時代だった。つまり, この時代にあつては, 「乙女」 (“girls”) なるものは「知識」 (“knowledge”) の水を存分に飲み, 「持てる力を高め」 (“lift your natures up”), 「自由を生み出す」 (“work out your freedom”) ことはまかり成らぬ, とされていたのだ。1873年前半のアメリカには, ようやく女性演説家も出現しだし, ある程度の成功をおさめるようになってきていたとはいえ, それのごく少数者に限られていた。彼女らが口を開き, 奴隷制反対, 禁酒運動, 婦人の権利などを訴えると, 忽ちにして激しく悪質な野次が飛び, 嘲笑の渦が湧き起った。当時, 男の “奴隷” であり, 男の “付属物” でしかなかった女性が, 十九世紀アメリカの「大怪物<sup>29</sup>」, 男どもの悪業の数々を暴く “The Revelations of a Woman’s Life” の演説をするということは, きわめて破壊的で, 許されるべきことではなかった。それをあえて行う者に対する処置は死罪と定まっていた。あの十五世紀フランスの, 腐敗の極に達し, 亡国のきざしを見せる母国を救わん

と、普通の乙女の生活を棄て、剣を手にして戦った“Saviour of France”の Joan of Arc を、当時の社会は非道にも火刑に処し、惨殺したのと同様に、Laura は、十九世紀アメリカの、投機と汚職に堕した暗黒社会に一条の光を投げかけた“Saviour of America”なるが故に、この社会は彼女に“石打ちの刑”<sup>30</sup>を宣告せざるをえない。恐るべき男性「大怪獣」の非道極まる報復をあえて書き綴るのが、*The Gilded Age: A Tale of To-Day* の使命であると Twain は信じて疑わなかったようだ。彼の書簡<sup>31</sup>によれば、Laura の、この“石打ちの刑”を描く問題章、“the boss chapter”<sup>32</sup>の第Ⅱ巻第二十九章は、初めは Warner が執筆したという。彼は例の裁判の後、Laura を田舎に引きこもらせ、ひっそりと余生を送らせることにしていたのを、Twain が全面的に書き直し、Laura を無残にも“a mackerel”<sup>33</sup>のごとく殺すことにしているからだ。“a partnership novel”を建て前とするこの小説だけに、Twain のこの思い切った書き換えはとくに重要な意味をもっている。

Twain は、この小説の執筆当時はまだ38歳という働き盛りであっただけに、アメリカの当時の現状を厳しく批判したが、母国の将来については、かなりな夢を寄せていた。この小説の英国版の序文にこう書いている。

... I have a great strong faith in a noble future for my country. A vast majority of the people are straightforward and honest; and this late state things is stirring them to action. If it would only keep on stirring them until it became the habit of their lives to attend to the politics of the country personally, and put only their very best men into positions of trust and authority! That day will come.<sup>34</sup>

この彼の夢の実現に大きく寄与できるのは、世間ずれして、恥を知らない都会の大人よりも、純情で多感な田舎の若者の方だし、また、投機や汚職に堕した夢みる男性より、純粋で優しく忍耐強い女性の方だ、と Twain は信じた。そこで、Joan of Arc 同様、“the incarnation of youth and purity

and power”<sup>35</sup>である Laura をこの小説に登場させ、“all-pervading speculativeness”と“shameful corruption”<sup>36</sup>で汚染した金メッキ時代のアメリカの浄化に当たらせたと考えられる。

ここまで辿ってきただけで明らかなように、Twain は Laura を Joan of Arc イメージに近づけようとつとめている点が幾つかある。たとえば、Joan を世に出した十五世紀のフランスを二分して味方同志戦った百年戦争と、十九世紀アメリカを二分して肉親友人相食む悲惨な戦争、Laura までも呑み込んだ南北戦争、との近似性。さらに、Joan はフランスの百姓の小娘から、フランス全軍を率いる“General of the Armies of France”へと拔擢され、他方、Laura はアメリカ西部の片田舎の孤児から、一躍、首都に君臨する“princess”とまで仰がれる躍進をする類似。そのあげくは、この二女性はそれぞれに幽囚の身となり、目を掩うばかりの数々の受難の末、万人の罪を償うかのように殉死する“the Page of Christ”という英名に値いすること。Joan が“France, the spirit of France made fresh”<sup>37</sup>なら、Laura は‘America, the spirit of America made fresh’と呼べば呼べるなどの類似点があげられる。

このように類似点を追うのはこれくらいにとどめ、ここで Joan of Arc 伝記の千切れた一頁が、少年 Clemens に“the first, if not the last, turning point in his life”<sup>38</sup>となり、作家 Mark Twain が誕生する重大なきっかけとなったという話<sup>39</sup>に触れる必要がある。1849年、ある風の日の午後、当時13歳の少年印刷工見習の Clemens が、印刷所からの帰り道、ハニバルの町の路上に、一枚の紙片が飛んで来たという。拾い上げて見ると、ルーアンの砦に幽閉された Joan of Arc の悲話を記す伝記の一葉だった。これが、この少年に強烈な感動を与え、後年、Mark Twain として世に出るきっかけを作ったというのである。このたったの2頁で、Twain のうちに焼きついた Joan of Arc イメージが異常に強烈だったことは、この小説が出てから23年ばかりも後の1896年に、彼はこの聖女 Joan of Arc の名前をその題名に堂々と

かかげた伝記書、*Personal Recollections of Joan of Arc* を二巻にまとめ、出版していることで明らかだろう。そして、この書に Twain が並々ならない愛着を寄せていたことは、1908年、彼がとくに “I like the Joan of Arc best of all my books; & it is the best; I know it perfectly well.”<sup>40</sup> と語ったことで明らかだ。

さらに、ここで忘れてはならないことは、Twain がこの Joan of Arc の書を書き始めようと思いついた頃、彼の手掛けていた “Paige typesetter” 発明の仕事や出版会社、その他の事業の不振で、出費が嵩み、まさに火の車の状態にあったが、それにも拘らず、この売れる見込みのない伝記にあえて挑んだという点である。彼が何でも打ち明けることのできた彼の女師匠 Mrs. Fairbanks に宛てた1893年1月の手紙に、次の文面が含まれている。

“That is private & not for print, it's written for love & not for lucre, & to entertain the family with, around the lamp by the fire.”<sup>41</sup>

これほどまでにひたすらこのフランスの聖女伝記にかけた彼の執念に、われわれは強く打たれると同時に、アメリカの当時の社会が、いや男性どもが、このような “Woman is the superior sex.” と広く世間に宣伝する書物をいかに毛嫌いし、いかに必死に抹殺しようとしたかが、よくこれだろうかといえることができる。Twain は、文人として一応功なり名とげ、人気を前ほど気にしなくなった1897年、*Following the Equator* を書き、その中で次のようにあけすけな男性攻撃、男性優位社会の墮落、を言葉にしている。

The women have accomplished a peaceful revolution, and a very beneficent one; and yet that has not convinced the average man that they are intelligent, and have courage and energy and perseverance and fortitude.

It takes much to convince the average man of anything; and perhaps nothing can ever make him realize that he is the average

woman's inferior—yet in several important details the evidence seems to show that that is what is what he is. Man has ruled the human race from the beginning—but he should remember that up to the middle of the present century it was a dull world, and ignorant and stupid; but it is not such a dull world now, and is growing less and less dull all the time.<sup>42</sup>

この男性が自らの非力を認めようとせず、男性絶対優位をあくまで主張する頑迷固陋な十九世紀アメリカ社会に抗して、敢然と“Woman is the superior sex.”の旗印を掲げて戦う Laura の末路は、このフランスの聖女 Joan of Arc と同じ末路にならざるを得なかったのである。十五世紀の男社会が Joan of Arc を“a witch”として死の宣告を下したのも、十九世紀の別の男社会が Laura を“a mackerel”のごとく殺戮するのも、もはや女抜きで人類社会を御し切れない男性の非力、自信喪失の表われと見てよい。

小説 *The Gilded Age* は従来、合作ということで軽視されてきた。が、この作品が十年後に Huck に託して黒人問題に Twain が取り組むきっかけを作ったろうことは容易に察しがつくし、それと共に、この小説が、それに劣らず極めて深刻な“the woman liberation”の問題に逸早く立ち向っていることに注目する必要がある。

(この小論は、1982年度日本アメリカ文学会関西支部九月例会での研究発表の原稿) に、加筆・補正を施したものである。

#### 注

\* Laura が Mark Twain のヒロインであることは、もはや定説である。Albert B. Paine が1912年、彼の *Mark Twain: A Biography* (I, 477n.) の中で Twain と Charles D. Warner のこの小説での執筆分担を次のように明らかにした。

The reader may be interested in the division of labor. Clemens wrote chapters I to XI; also chapters XXIV, XXV, XXVII, XXVIII, XXX, XXXII, XXXIII, XXXIV, XXXVI, XXXVII, XLII, XLIII, XLV, LI, LII, LIII, LVII, LIX, LX, LXI, LXII, and portions of chapters XXXV, XLIX, LVI. Warner wrote chapters XII to XXIII; also chapters XXVI, XXIX, XXXI, XXXVIII,

XXXIX, XL, XLI, XLIV, XLVI, XLVII, XLVIII, L, LIV, LV, LVIII, LXIII, and portions of chapters XXXV, XLIX, and LVI. The work was therefore very evenly divided.

そして、Laura については、こう指摘した。

Judge Hawkins of *The Gilded Age*, as already noted, was John Clemens. Mark Twain used the name Hawkins, also the name of his boyhood sweetheart, Laura, merely for old times' sake, and because in portraying the childhood of Laura Hawkins he had a picture of the real Laura in his mind.

(I, 68n.)

これより四半世紀後の1937年、Ernest E. Leisy が “Mark Twain's Part in *The Gilded Age*” (*American Literature* Vol. 8, No. 4, January, 1937) で、上の Paine の余りにも明快な分担に幾つか疑問を投げかけたが、大きな手直しはなかった。

1965年には *The Gilded Age* について、二つの画期的な業績が出た。その一つは Charles Neider の編纂に成る *The Adventure of Colonel Sellers* (London: Chatto & Windus, 1966) で、Neider はその “Introduction” で、Laura が Colonel Sellers や Washington Hawkins と並んで “Mark Twain's sole creation” だと断定している。あとの一つは Bryant M. French の *Mark Twain and “The Gilded Age”* (Dallas: Southern Methodist University Press, 1965) だが、French は、とりわけ Laura についての考証を深め、第V章全部をその詳述に当てている。French は実に明快に見易く、両作家の協同執筆分担表を掲げた後、次のように述べている。

As can easily be seen, Mark Twain's characters are the Hawkineses, Laura, Clay, Colonel Sellers, Senator Dilworthy (once Warner has introduced him), the Washington society group, and the venal congressmen. . . (p. 63)

\*\*本文中、および下の注の引用文はすべて *The Writings of Mark Twain* Vol. V, Vol. VI (New York: Gabriel Wells, 1922) からのもの。各引用文の後に、この Vol. V を I, Vol. VI を II, で表わし、その後に頁数を記した。

- 1 Paul Fatout (ed.), *Mark Twain Speaking* (Iowa City: Univ. of Iowa Press, 1976), pp. 20-21.
- 2 *Ibid.*, pp. 78-80.
- 3 *Ibid.*, p. 80.
- 4 The girls would not have been permitted to work for a living under any circumstances whatever. It was a Southern family, and of a good blood. (I, 63)
- 5 . . . veiled and pinioned and shut in by disabilities. (I, 140)

- 6 "I wish I could go West, or South, or somewhere. . . ." (I, 140)
- 7 "I am sure thee is little interfered with. . . ." (I, 136)
- 8 "I wish. . . that she were in the way to fall in love and marry by and by. . . ." (I, 144)
- 9 J. Hector St. John de Crevecoeur の有名な言葉 "this new man" のもじり。
- 10 Charles Neider (ed.), *The Adventures of Colonel Sellers* (Chatto and Windus, 1965), Intro. xvii
- 11 Dilworthy については, Albert R. Kitzhaber, "Mark Twain's Use of the Pomeroy Case in *The Gilded Age*", *Modern Language Quarterly*, XV (March, 1954), pp. 42-56. および, Bayant M. French, *Mark Twain and The Gilded Age* (Dallas: Southern University Press, 1965), pp. 85-95. を参照のこと。
- 12 "The Tennessee Land" (Seventy-five Thousand Acres of Land in Tennessee). *Mark Twain's Autobiography* (Harper & Brothers, 1924), I, pp 3-7 を参照のこと。
- 13 この "money" と "beauty" とが, 最初にあげた演説, "Women—The Pride of Any Profession and the Jewel of Ours" で繰り返して強調された "treasure" と "ornament" とに符合することに注意。
- 14 この語は, 各巻頭のモットーの中に瀕出。それも, もっぱら女が仕掛け, 男がはまる「罠」という内容のもの。
- 15 Squire Hawkins の夢で, 彼の口癖の語。子らに望む最高のもの。  
One of these days it will be 'the rich Miss Emily Hawkins—and the wealthy Miss Laura Van Brunt Hawkins—and the Hon. George Washington Hawkins, millionaire—and Gov. Henry Clay Hawkins, millionaire!' (I, 42)
- 16 . . . it came to be said that her way was paved with broken hearts. (II, 34)
- 17 "It was keen delight to Laura to prove that she had power over men." (I, 194)
- 18 先の Bryant M. French, *Mark Twain and The Gilded Age* (pp. 113-114) に次の記載がある。

Some women lobbyists were highly paid prostitutes; the munitions manufacturer Colt, for example, maintained a whorehouse on C Street. A contemporary observer wrote that he "never knew a woman to exert an 'influence' here, who did not become common, descend to lobbying, lose her credit, and increase the skepticism of men." That Clemens at first had this kind of lobbyist in mind as a model for Laura is shown by a discarded page

of manuscript, which states that "the hidden fires were making wasteful destruction within."

- 19 "Look out for him, my child! . . . Be wary. Be very, very careful, my dear. . . ." (II, 100)
- 20 "You have ruined my life." (II, 72)
- 21 ". . . You betrayed me, and left me, mocking me and trampling me into the dust, a soiled cast-off. . . ." (II, 72)
- 22 "My God! I can't, don't fire." (II, 152)
- 23 Paul Fatout, *op. cit.*, p. 79.
- 24 Mark Twain, *Personal Recollections of Joan of Arc*, II, p. 107.
- 25 *Ibid.*, II, p. 104.
- 26 a handful of coarse men (II, 297)
- 27 ten or twelve still coarser women (II, 297)
- 28 a brutal laugh and an explosion of cat-calls (II, 297)
- 29 この語は第I巻第三章のモットー、フランソア・ラブレー『パンタグリユエル物語』(第四之書33章渡辺一雄訳)の中に出でくるもの。
- 30 "scratching Laura's forehead" などとせず, "wounding Laura's forehead"として Twain は彼女の受難を描き, 明らかに"石打ちの刑"をにおわせている。
- 31 Dixon Wecter (ed.), *Mark Twain To Mrs. Fairbanks* (San Marino: Huntington Library, 1949, pp. 170-171.

Every [*sic*] since I arrived from England, several months ago, Chas Dudley Warner & I have been belting away every day on a *partnership novel*. I have worked 6 days a week—good full days—& laid myself up, once. Have written many chapters twice, & some of them three times—have thrown away 300 clean pages of MS. & still there's havoc to be made when I enter on final polishing. Warner has been more fortunate—he won't lose 50 pages.

Three more chapters will end the book. I laid out the plan of the *boss* chapter, the climax chapter, yesterday, & Warner will write it up to-day; I wrote it up yesterday, & shall work & trim & polish at it to-day—& to-night we shall read, & the man who has written it best is all right—the other man's MS. will be torn up. If *neither* succeeds, we'll both write the chapter over again.

Every night for many weeks, Livy & Susie Warner have collected in my study to hear Warner & me read our day's work; & they have done a power

of criticising, but have always been anxious to be on hand at the reading & find out what has been happening to the dramatis personae since the previous evening. They both pleaded so long & vigorously for Warner's heroine, that yesterday Warner agreed to spare her life & let her marry—he meant to kill her. I killed my heroine as dead as a mackerel yesterday (but Livy don't know it yet).

32 *Ibid.*, p. 170.

33 *Ibid.*, p. 171.

34 Charles Neider (ed.), *op. cit.*, Intro. xvii.

35 Albert E. Stone, Jr., "Mark Twain's *Joun of Arc*: The Child as Goddess", *American Literature*, Vol. 31, No. 1 (March, 1959), p. 5. Stone, Jr. は "In Twain's eye Joan was 'the incarnation of youth and purity and power'. She was the unique instance in history of the young girl whose innocence not merely *existed* but *acted* in the gross world of adult affairs. She was the peerless human being, and it was the utmost importance that she remain eternally a young girl." という Joan 評の中で、この表現を用いた。

36 Charles Neider (ed.), *op. cit.*, Intro. xvii.

37 Mark Twain, *Personal Recollections of Joan of Arc*, I, p. 256.

38 Albert E. Stone, Jr., *op. cit.*, p. 1.

39 この話には Albert E. Stone, Jr. のこの論文の他, Albert B. Paine, *Mark Twain, A Biography* (New York, 1912), I, pp. 81-82., Kenneth S. Lynn, "Huck and Jim", *The Yale Review*, XLVII (Spring, 1958), p. 421. などが触れているが、いずれも軽く扱っている。

40 Albert B. Paine, *op. cit.*, III, p. 1034.

41 Dixon Wecter (ed.), *Mark Twain To Mrs. Fairbanks*, p. 269.

42 Mark Twain, *Following the Equator* (New York: Harper & Brothers, 1906), I, p. 315.

## Synopsis

Woman in *The Gilded Age*

—A Discussion about the Death of Laura—

Yorimasa Nasu

Much has been written about the collaboration of Mark Twain and Charles D. Warner in writing *The Gilded Age*, and the exact part which each author had in the work has been heretofore made almost clear; but why the brave and robust heroine Laura must die suddenly remains to be explained. The two authors try to describe the adventures of Twain's heroine Laura and Warner's heroine Ruth respectively. Twain attempts the revelations of a self-made woman who wishes to "have power over men," and is taken to Washington under the patronage of Senator Dilworthy, and Warner presents a new young Quakeress who is against the custom and conventions of the Quakers and dares to go out into the world as a female doctor. The self-made woman, Laura, displays her own ability and takes an active part as a female lobbyist in Washington. While Ruth falls ill under the strain of the hard work required, and past all hope of recovery, miraculously escapes to a happy marriage with Philip, Laura, who has never been defeated or had to suffer, dies from the shock of her cruel reception on the lecture platform. The regret and resentment she seems to feel then are well expressed by the chapter-head motto of CHAPTER XVI, II, "My bravery and my power have availed me nothing! Alas, let

heaven and earth hear me! Is it true that I must die, that I must die here, between earth and sky?"

According to Albert B. Paine, dissatisfaction with the quality of some popular novels was expressed by Twain and Warner, and by their wives the husbands were challenged to write a better novel than those they had criticized. Later critics point out that among such popular novels are included many novels by American women authors about women. So, it will be easily understood that the authors made every effort to reveal their own attitude towards women as very plainly as they could. Different from Warner, Twain viewed the role of women in his own way; he believed that men were rough and crude in their own nature, and needed the softening and refining influence of women. One critic says that Twain thought that the primary function of woman was the reformation of man. Hence it appears that Twain deliberately tried to present his heroine Laura as the reformer of men bereft of "speculativeness" and "shameful corruption."

It is well known that, one day in 1849, the wind blew a stray leaf from the book about Joan of Arc across the path of young Sam Clemens in Hannibal, Missouri; this natural event became "the first, if not the last, turning point of his life" which led the young Sam to the future career as a man of letters. The event seems to have influenced the characters, male and female, of Twain's works more greatly than we suppose. In Twain's eyes, the maiden saviour of France, Joan of Arc, was "the incarnation of youth and purity and power." The interest first aroused by the stray leaf in Hannibal was long sustained, and induced Twain to write a tale about an American Joan of Arc of the 19th century. The 15th century French maiden Joan and the 19th cen

tury American, self-made woman, Laura, have something in common with each other; in particular something most important as a human being. The character of Joan and Laura "occupies the loftiest place possible to human attainment, a loftier one than has been reached by any other mere mortal." Twain remarks in the "Translator's Preface" to *Personal Recollections of Joan of Arc*: "When we reflect that her century was the brutalest, the wickedest, the rottenest in history since the darkest ages, we are lost in wonder at the miracle of such a product from such a soil. The contrast between her and her century is the contrast between day and night." That is the case with Laura who comes into being in the pre- and post-Civil War days of America. And both of the poor village girls, who had never been defeated by the male enemy, were defeated by their dark and rotten century, and rewarded with Joan's Death by Fire, and by Laura's Death by Stoning. Twain made no mention of Joan for the model of Laura; but the author, in November, 1873, just after *The Gilded Age* was published, delivered a speech titled "The Ladies" in London, stating "Who was more patriotic than Joan of Arc? Who was braver? Who has given us a grander instance of self-sacrificing devotion? Ah, you remember, you remember well, what a throb of pain, what a great tidal wave of grief swept over us all when Joan of Arc fall at Waterloo." Judging from this arduous cult, it is possible that Joan was a figure of so strong fascination to him, and consequently the French maiden was reborn as Laura who attacks the shiftlessness and corruption of the Gilded Age, and falls piteously in New York. Critics thought of several other models for Laura; Mrs. Laura D. Fair, Victoria Woodhul, Anna Dickinson, Mrs. Lucy Cobb, and others. Their observations are based on

trivial points of superficial similarity rather than on character. The image Twain constructed of Laura in the novel was the result of much thought. As in the case of Joan of Arc, the martyrdom of Laura reveals the rottenest and the brutalest of the pre- and post-Civil War days of America, and makes of her "the peerless human being who remains eternally a young girl." In short, Twain presents her death as a Christlike victory of the feminine principle of human virtues.